SUMITOMO

住友建機 リサイクル紀行

Vol.32 カネテツ（東京都）

およそ3800万人が暮らす東京都市圏は、都市圏の人口数で世界一を誇るという。人口に比例してスクラップの発生・流通量は多いが、北関東地区と南関東地区では、発生するスクラップの量や種類、ヤードの運営スタイルも大きく異なる。1964年に東京都葛飾区で創業したカネテツ（本社＝東京都足立区、阿部正二社長）は、本社の都市型ヤードと茨城県古河市にある郊外型ヤードの両方を運営している。

拠点所在地

都市型コンパクトヤード 高い効率性が運用のカギに

東京都の北東部、埼玉県と隣接する足立区入谷にカネテツは本社工場を構えている。準工業地域でありながら都心部に近く、周辺に産業廃棄物などのリサイクル関連企業も多い。工場は敷地面積がおよそ2600㎡のコンパクトな都市型ヤードだ。周辺環境に配慮して、昨年には敷地のおよそ3分の1をカバーする半屋内型の建屋を設置した。

かつては自動車解体由来のスクラップを主力としていたが、油圧シャー（切断圧800㌧）を導入した2000年代に加工処理の幅が拡大した。月間の鉄スクラップの取扱い量は約2500㌧。このほか、非鉄金属の加工や安定7品目を含む産業廃棄物の中間処理も行っている。

本社工場の搬入口には、金属スクラップや各種廃棄物を積載したトラックがひっきりなしに入場してくる。これらは都市部の解体現場や周辺のリサイクル企業から運ばれてくるものが多く、工事現場やオフィス由来のものなど、受け入れる品目は様々だ。

敷地面積や作業スペースに限りがある都市型ヤードでは、効率的な運用がカギとなる。

本社工場（東京都足立区）

受入れ、加工、出荷の全てのフローを迅速に行わなければ、工場内に品物が滞留してしまうためだ。現場を統轄する阿部正樹専務も「まずはスピードが重要」と迅速な対応に徹底してこだわる。

サービスにおいては取り扱い品目の「幅」もポイントだ。スクラップや廃棄物などを一挙に引き受けることは、ユーザーの仕事の効率を高めることに直結する。国内のスクラップ関連事業において、『ワンストップ』というフレーズが定着して久しいが、カネテツでは幅広いサービスに早くから取り組んできた。

本社の取扱い数量の拡大にともない、2007年には茨城県古河市のバイパス道路沿いに「古河メタルリサイクル」を開設した。敷地面積およそ1万㎡を有する郊外型のオープンヤードに、切断圧1200㌧の油圧シャーなどの加工処理機や各種トレーラーを完備している。

北関東は都心部に比べて敷地面積が広く、荷動きの速度や単価設定といった商売の基準が異なるため、同社も地域特性に合わせた運営を心掛けている。品質対応においては鉄スクラップの選別処理を行うなど、広いスペースを活用した加工も行っている。

受け継がれる「仕事の教え」 領域広げて更なるニーズ捕捉へ

左から阿部正二社長と阿部正樹専務

本社工場では現場の責任者として、古河メタルリサイクルでは社長として仕事に従事する阿部専務は、この道32年の熟練者だ。ヤード運営、機械、多岐に渡る商材の特徴など、リサイクルの現場に精通した知識と技術を持ち合わせている。親族が営む水道会社を経て、1990年にカネテツに入社。最初は敷地内の缶拾いから始めたという。工場内の片付けを続ける中で、金属の種類や特徴などの知識を吸収していった。

一連の仕事にようやく慣れた頃、長らく続く相場の低迷が始まった。逆有償となった時期には、有価購入を続けていたカネテツにスクラップが殺到した。とにかく忙しい日々だったが、現場に長けた叔父・阿部万三氏（当時の工場長）からの教えもあり「鉄スクラップの奥深さをさらに知ることができた」と振り返る。

創業者であり、社長であり、父である正二氏は細かな口出しこそしなかったが、安全面で大切なことや迅速な対応が継続的な商売につながることなど、経験をもとにした仕事の要領を教えてくれた。「いま私が社員に伝えていることは、かつて社長が伝えてくれたこと」（阿部専務）という。

今後もこうした教えをもとに、ユーザーニーズを一番にした運営を続けながら、取り扱う金属や廃棄物の領域をさらに広げていく方針だ。

～住友建機がある風景～

SH250-6MF：（本社工場）カネテツと古河メタルリサイクルではそれぞれ3機の住友建機製マシンを導入している。カネテツ本社で主力の2機はマグネフォークとグラップルタイプ。今年7月にSH250-7MFとSH250-7MPへ更新する予定だ。

「人馬一体型」のマシン

設備の故障により作業が滞ってしまう事態は、コンパクト型のヤードにとって致命的になる。阿部専務が住友建機を選ぶ理由として最初に取り上げたのも、マシンの耐久性だった。2005年に導入したSH240-3（油圧全旋回グラップル機）は、古河メタルリサイクルで今もなお現役機として稼動している。

効率的な作業を実現する上では、耐久性や燃費、パワーといった機能性に加えて、操作時のフィーリングも大事になるという。究極は自分の手を動かすように滑らかに動き、掴み、離す、いわば「人馬一体型」のマシンだ。

【SH250-7MP】（本社工場）
作業範囲はマシンのすぐ手前までカバーしている

阿部専務が住友建機の進化を最も感じたのが、2000年代後半に開発された5型のマシンだった。

依頼を受けて初めて操作したマグネフォークタイプの試作機は、フィーリングが重く、作業性も心もとなかった。感じた点をダメ出しに近いかたちで包み隠さずに伝えたという。その後、改良されたテスト機は完璧に仕上がったものになっていた。

機械の性能だけではなく、営業担当やサービス、開発が全体でユーザーの話にしっかりと耳を傾けていることを感じた。こうした姿勢も住友建機を支持する大きな理由になっている。

担当：土井　章成

住友建機の営業として“誠実さ”を大事にしております。サービス部隊と共に、お客様のお役に立てるようこれからも精一杯やらせていただきます。

住友建機販売株式会社　東京支店
〒136-0082 東京都江東区新木場1丁目14番5号
Tel：050-9001-8608　Fax：03-5534-7201